



ISSN 1344 - 5634

米子高専図書館報
第108号令和2年1月30日 発行
米子工業高等専門学校図書館

図書館のある学生生活

図書館長 川邊 博

1980年代の人口6万の遠い小さな街での話である。田舎から自転車で6キロの道を通う町の高校に進み、高校生活にも慣れた頃、たまたま友人仲間と市立図書館に入ったとき、図書館の利用料金がなかったことを知って衝撃を受けたものだ。町の人は好きな時に利用し、一方自分のような田舎者はその存在も知らず、地域による格差に不公平感を抱いたものである。当時新築の市立図書館はガラス張りで明るく、開架室から階段でつながる中二階の学習室の大きな窓からは、今となっては懐かしい町並みが広く見える。床はカーペット張りで机や椅子も新品、エアコンも完備で快適であった。授業から解放された後、町中で自由に立ち寄ってゆっくりと過ごせる場所が持てたのが心地よかった。試験前は高校生で騒然となるが、普段は静かで勉強をすればはかどった。本好きとはいえなかったが、授業やテレビ番組などでにわかに関心をもった内容のものには、資料がそこにあるのだから手が伸びた。いま振り返ってみるとこの図書館にはずいぶんと助けられたと思う。家とも学校とも違う第三の居場所を与えてくれ、自然に勉強し、将来に夢憧れを抱いたあの空間、図書館があったことは幸運であったと思う。大学に進んで新しい街でも何かに集中するときには図書館であった。特に県立図書館に行くと県庁所在地に住む学生の特権だと思えたものである。

さて、みなさんも直接成長につながる学校生活と、ゆっくり鋭気を養う寮や家での生活に加えて、世界を

広げることにつながる第三の居場所として図書館を活用してください。まずは一人で宿題をするだけでもよいと思います。自分を見つめて、内面から湧き出る興味を大切にします。時に何か手がかりを求めて、また時には気持ちの向くまま自ら本に手を伸ばす。これは静かではあってももっとも積極性が示される行為です。みなさんが技術者として活躍する近い将来は、新しい価値の創出が求められる時代です。新しい発想の源泉を抱えておくためには、専門を学びながら必ずしも授業と直結しない多様な価値観にも触れておくことが重要です。実際に活躍する人の話を聴く機会を大切に、著名な人が多大な時間とエネルギーをかけた、その人の本質が凝縮された書物に学びを求めることは、昔から変わらない有効手段です。

米子高専の図書館は、この辺りではどこよりも明るくきれいで、静かに集中できる図書館だと思います。それに見合うだけの価値がある目的のために整備されているのです。これを無料で活用できることが、後からわかる本校で学ぶ大きな意味であり、本校の望む「自ら学ぶ能力」につながります。今や、県庁所在地から離れた本校図書館においても、県立図書館の恩恵は十分に受けられます。鳥取の県立図書館は、図書予算全国5位、人口当たりになると全国一で、これは鳥取県の誇るべき特長です。発達した県内の図書館ネットワークにより、検索して依頼すると二日後には図書館に届けられ、無尽蔵ともいえる書物にアクセスできるのです。このわずかな積極性の種がみなさん一人ひとりの感性や価値観に影響する大きな収穫となる、これが鳥取県の望みでもあるのです。

目次

図書館のある学生生活	1
読書感想文部門入賞作品	2
エッセイ部門入賞作品	5
読書感想文・エッセイコンクール入賞作品紹介と講評	7
ビブリオバトル	8
ブックハンティング	8

最優秀賞

「変身」を読んで

建築学科5年 渡下 宗太郎

自分とは何者なのか。そんな問いを抱いた事が誰しもある筈だ。将来や進路、これからどう生きていくのか悩む私もその一人だった。進路について様々な人に相談したが、結局何が最適解でどう進んでいいのかわからなくなっていた。そんな折、某先生に紹介され「変身」を手にとった。異様な状況の中で人間のアイデンティティを問い直すこの作品は当時の私の心に強く響いた。

ある朝、主人公グレーゴルが目覚めると自分が巨大な毒虫に変わっているのを発見する。人間の言葉も上手に喋れず、体も思うように動かない。同居する家族はおぞましい姿のグレーゴルを邪魔者扱いするようになる。一家の大黒柱であったグレーゴルが毒虫に変身したことで周囲からの認知や待遇が変わり、最後には父親に傷つけられた怪我が原因となって死んでしまう。家族は息苦しい暮らしから解放されたことを喜び、今後の幸せに希望を見出すのであった。

一読して、なんと不条理で悲しい話なのだろうと感じた。グレーゴルが見舞われた不幸は家族にとっても不幸であったはずだ。醜い毒虫の世話をしなければならないという心理的な負担を抱えながら、経済的危機にも襲われるのだから。しかし、変身後のグレーゴルが受けた冷遇はあまりにも酷く虚しいものだった。彼ら家族が認め、慕っていたのはグレーゴル本人などではなく勤勉に働く家族の大黒柱という虚像だったのである。もしも、自分が毒虫のように異形なものになってしまったら…周囲の人々の反応は？自分の今の立場は？想像するだけで恐ろしい。何の罪もないグレーゴルを襲ったこの極限の理不尽は何を表し、訴えているのだろうか。

一変した周囲の環境や人々の反応に翻弄されたグレーゴルは人間として生きることを諦め、毒虫として生活するようになってしまった。私達がこのような状況に陥ることは生きていく上で皆無であるが、グレーゴルの感情は理解できるだろう。現代社会には他人や世間の評価で自己を形成する人間が多く存在している。つまり、グレーゴルのように自分の存在証明を他人に任せて生きてしまっているのだ。この作品は自己が自分自身ではなく他人の認識によって形成されてしまうことを毒虫で比喻しているのだと読み取れる。しかし、人間それでいいのだろうか。インターネット

やSNSが発展し、直接言葉を交わさないコミュニケーションが当たり前になっている世の中で、世間の風潮や他人の意見に流され、自分自身で明確な価値観を持ち行動することが出来ない人間は増えている。私達はどうか。他人の目を気にして自分の気持ちを押し殺し生きていないだろうか。否定されることを恐れ、大きな決断や判断することから逃げていないだろうか。

私には両親や祖父母、先生など自分を認めてくれる数多くの大人が身近に居てくれた。様々な意見を聞くことが出来る反面、大きな決断になると意思が固まらず、迷ってしまうことが多々あった。この作品を読み、私は自分自身のアイデンティティを喪失してはいないかという危機感に駆られた。他人が決めた自分を演じて生きることは確かに楽かもしれない。批判も無く、誰からも好意的に映る。しかし、それは本当に自分自身であると誇りを持って言えるのか。否、自己は自分の意思で形成し、確立するものだ。

自分とは何者なのか。これは人間の一生のテーマだと思う。この本は私自身の人生を見つめ直すきっかけとなった。今後、私達は大切なものとそうでないものを取捨選択しながら自分の道を選び生きていこう。たとえその過程で何度失敗しても前を向いて進むことが出来る、そんな人間になりたいと強く感じた。

私たちの使命

電気情報工学科1年 亀尾 茉央

現在、様々な現象やものの解明がものすごい勢いで進んでおり、科学技術の発展とそれをもとにした技術開発は、私たちの生活を豊かにしている。スマートフォンが一台あれば、どこにいても大量の情報を得ることができ、世界中の誰とでもつながることができる。また、車の自動運転が実現すれば、免許を持たない我々でも、車の運転が可能になるようになるかもしれない。私にとって科学とは、不可能を可能にしてくれる魔法のようなものだ。

しかし、先日「ゲノム編集」技術で開発した食品のニュースを見て、疑問に感じたことがある。科学は、生活を豊かにしてくれる一方で、時にとても危険なものにもなるのではないかと。交配などの突然変異によって長い期間かけて行われてきた品種改良が、ピンポイントで遺伝子を操作することが可能になった。この技術をもし、医療に使うことができれば、多くの人を救えるかもしれない。しかし、この技術が生殖細胞や受精卵に応用され、一人の人間を作りだしたらどうだろう。自然界にないものを生み出すことで人体や環境への影響も未知数である。我々が今まで大切にしてきた文化も環境も崩壊してしまうに違いない。

この本は、そんな私の疑問に、一つの示唆を与えてくれた。著者、長谷川眞理子氏は、自然人類学、行動生態学を専門とする学者だ。たくさんの動物の多様な生き方、ヒトや動物の行動の進化の過程、その結果生まれたヒトだけが持つ能力について知るたびに、我々の文明の行き着く果てはどこか、次世代へどうつなげるかについて深く考えさせられた。

中でも、私の興味を引いたのは、「ヒトの脳には、他の動物にはない特殊な能力がある」ということだ。それは、「心」である。ここでいう「心」とは、単なる気持ちを表すのではなく、他者の意図や行動を汲み取り解釈しようとすることだ。この人間らしさを生み出す複雑な心を担っているのは、脳の前頭前野という部分である。ヒトの脳はとても大きい上に、チンパンジーの前頭前野が脳の17パーセントなのに対して、ヒトは29パーセントを占めているそうだ。このような動物は、ヒト以外にはいないらしい。

なぜ、ヒトは進化の過程で脳を大きくするという選択肢をとったのだろうか。人類の祖先が営んでいた狩猟採集生活は一人で行うことは不可能で、何らかの集団に属し、そこで仲間と認められなければ生き

ていくことはできず、他者と「心」を共有することができた個体の子孫が現在の人類に進化していったと、長谷川さんは言う。人類の「心」は、自分が持っているのと同じ「心」を他者にも見いだせることが他の動物と根本的に違うところなのである。

ヒトが他の動物と違う点はほかにもある。それは、子どもを育てる時に関わる人数だ。親が何らかの子育てをする動物は、母親と父親のどちらか一方か、あるいは両親がともに世話をするかに分類できるが、ヒトは両親に加え、祖父母、さらに血のつながりのない他人までもが子育てに関わる。他人の子どもにまで愛情を注ぐことができるのは、ヒトにしかできない行動なのである。他人までもが子育てに参加できるのは、他者の立場に立って物事を考えることができるヒトだからこそその行動ではないだろうか。

このヒトだけが持つ「共感」「協力」という高度なレベルの社会性こそが、私たちヒトの最大の特徴であり、強みでもある。私は、科学技術の未来を考える上で、ここに答えがあるのではないかと考える。

私たちが望む未来は、科学技術によって欲望を満たすことだけを追求し、指一本で、言葉一つで何でも叶う世界ではないはずだ。ヒトは他者に共感するので、他者をないがしろにすることも、自己利益だけを追求することもできない。また、自分たちの世代だけが幸福に暮らすことができれば良いのではなく、将来の世代の利益も考えることができる。そして、ヒトが自分の「心」を言語で表現し、他者と共有することで、お互いの認識を確かめ、認識が異なるならば納得するまで話し合うことができる。

私は高専に入学し、ものづくりを学んでいる。自分の研究だけの狭い視野しか持ち合わせていないような技術者にはなりたくない。科学の方法とその限界、科学と社会の関係を考えながら、ヒトとしての「心」を正しく使い、未来の世代にも「共感」と「協力」を得られるような技術者を目指して、これからも学んでいきたい。それが、科学技術の発展に関わる者の責任でもあり使命でもあるのだから。

優秀賞

星の王子さまとぼく

建築学科1年 野口 凜太郎

僕は、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』を読んで二つの場面が印象に残りました。その場面で僕が考えたことについて書こうと思います。

一つ目は、主人公の僕になぜバラにはとげがあるのか尋ねる場面です。尋ねられた僕は忙しかつたので適当に答えてしまいます。それに怒った王子さまが、「ぼくはこの世で一輪だけの花を知っていて、それはぼくの星以外どこにも咲いていないのに、小さなヒツジがある朝、なんにも考えずにぼくっと、こんなふうにならぬ花を食べてしまっても、それが重要じゃないって言うの。」

と言います。このセリフがとても印象的で物事の表面しか見られていないことを再確認させられました。バラのとげの理由なんて自分にとってはどうでもよくても王子さまにとってはとっても重要なこと。これに気付けないのは一見あたりまえに思えますが、ただ想像力に欠けているからなのです。王子さまには帽子のような絵が象を食べた蛇に見えますし、箱の絵を見たら中にヒツジを見ることが出来ます。子どもの頃には皆が持っていた想像力は大人になると多くの人が失ってしまいます。僕も電車に乗っている時、窓越しにたくさんの人を見て、関わりのない他人でも自分と同じように機械的じゃなく考えて動いているんだなあと視覚外のことを想像できました。しかし、他人のストーリーまで想像できなかったので、王子さま目線では僕も少しずつ大人に近づいているのかなあと感じました。それでも、同調圧力に揉まれ表面でしか物事を捉えられない大人にだけは絶対にならないと、この場面を読んで心に決めました。

二つ目は、王子さまと仲良くなったキツネが別れる場面です。王子さまは自分の星にかけがえのない存在であるバラを一人残して地球に来てしまいました。キツネは別れ際に、バラがかけがえのない存在になった理由を教えます。

「きみのバラをかけがえのないものにしたのは、きみが、バラのために費やした時間だったんだ。」

とキツネは言いました。また、キツネは

「人間たちは、こういう真理を忘れてしまった。」

とも言いました。このセリフはとても衝撃的でした。物の価値や人との関係は費やした時間によって決まるというのは言われてみればあたりまえですが、言われるまで気がつきませんでした。このセリフには色々考

えさせられます。例えば、食べ物を粗末にすることも時間に関わっていると思います。食べ物をお金を払うだけで完成した状態で食べられる現代では、野菜を育てる時間や料理を作る時間がかかりません。そのため、食べ物に対してかけがえのない物や思い入れがある物などと感じず、粗末にしてしまうのだと思います。僕自身、自分で作った料理より、高級なお金のかかる料理のほうが記憶に残るように思います。それはとても切ないことだなあと感じさせられました。世の中がお金に振りまわされているように感じました。時にはお金によって得られる幸せもあります。しかし、限られた人生の大半をお金のために学び、職を選び、働くというのは少し馬鹿らしく思います。時間で物を見て、時間をかけて学び育む。それが、一番自然だと感じさせられました。

この本『星の王子さま』にはおとなと子どもの違いについて所々書かれていました。自分ももっと小さかったころを思い出してみると、見えないものも見ることができ、お金より経験や一瞬の喜びを大事にしていたと思います。それに対して今の自分は、夢を尋ねられても現実味のある返答をします。未来を考える時も給料のことや周りの人の声を気にしてしまいます。それが大人になるという事だとわかっています。大事なことだとわかっています。それでも、おとなになることはそれほどまでに大事でしょうか。王子さまにとってのバラのように、自分にとって特別な人生を、誰かにとってかけがえのない人間になりたい。限られた時間をお金や生活なんか考えずに同調圧力を押し加えて、せつかく一度なのだから夢を全力で掴みにいきたい。そう思わせてくれる作品でした。

最優秀賞

「面白がること」

物質工学科5年 佐々木 眞央

私には、大切にしている言葉がある。それは、星野源が、彼のエッセイである『そして生活はつづく』の中で言った、『つまらない毎日の生活を面白がること』という言葉だ。

私には小さい頃から個性がなかった。勉強も運動も全くできないわけではないけれど、特技も才能も打ち込めるものもなかった。ある程度できるのならそれで十分じゃないか、と言われてればそうかもしれない。けれど、学校に行けば才能のある友達と自分を比べて落ち込み、どうして自分の生活はこんなに地味なのかと、常に劣等感を抱いていた。

そんなとき、彼のエッセイに出会った。それは、私がこれまで地味だと感じていた普通の生活を題材として、『つまらない毎日の生活を面白がること』をテーマに描かれた作品だった。そして、この本は信じられないくらい面白かった。『面白がること』で、こんなにも普通の生活は面白いものになるのかと驚いた。それと同時に、私に足りなかったのはこの『面白がること』だと気づいた。

それからは、今までよりも毎日の生活に目を向け、『面白がること』を心がけるようになった。もちろん生活自体は何も変わらないし、何気ない日常は何気ない日常でしかないため、最初のうちは難しかった。けれど、続けていくうちに、だんだん心にゆとりが生まれ、地味な生活を好きになることができた。他人と自分を比べてしまうことは未だにあるが、それも人間味があって面白いと思えるようになった。心にゆとりが生まれると、日常の中で面白そうだと思ったことに、気軽に挑戦するようにもなった。

そして今も、図書館の事務の方に勧められ、人生で初めてエッセイを書いている。書き方も分からないし、昔の私なら絶対に断っていたと思う。けれど、これでまた少しだけ自分の視野が広がった気がして、今とてもわくわくしている。

優秀賞

「小説が読めなくなった話」

電気情報工学科5年 種 香夏

この日、私は五千円分もの図書カードを手に途方に暮れていた。運よく優勝したビブリオバトルで得た、自分の財布に入っている現金よりも多額の“本なら何でも買える魔法のカード”。今までの私なら手放して喜んでいる所だが、この時ばかりはそうもいかなかった。校内の読書会に参加し、ビブリオバトルで優勝し、本屋に足しげく通う私は、段々と小説が読めなくなっていたのだ。

それまでも課題や他の活動に忙しく何日も読めない事はあった。学校用鞆とは別の小さな鞆に読みたい本を何冊も詰め、少しでも読み進めようとどこにでも本を連れて歩いた。しかし読む時間の有無ではなく、自分の内面の問題で読めなくなったのだ。本を開いても文章が頭に入ってこない。情景が頭に浮かんでこない。目が滑る、何度も同じ場所を読んでしまう、胸がざわざわして落ち着かない…。何日も読めない日が続いて疲弊した私は、いつしか本を開く事すら諦めてしまっていた。

新たな本との出会いを意識的に避けつつ、今まで読んだ小説の内容をゆっくり反芻して咀嚼し嘸下する、草食動物の食事のような本との生活を送る私にとって、この高額図書カードは青天の霹靂だった。もちろん、小説が読めるようになるまで使わずにとっておいてもいい。だが次に小説が読めるようになるまで一体あとどれくらいかかるのだろうか。いつまで五千円分のプレッシャーに耐え続けなければならないのだろうか。人生で本に支えられ続けていたはずなのに、本が読めないと悩む事自体が悔しくてたまらない。とにかくこの図書カードの呪いから一刻も早く解き放たれようと、棚の配置すら覚えている慣れ親しんだ書店へと足を運んだのだ。

さて、それにしても本当に読みたい本が見つからない。本を開いた先から文章が崩れ去り、ページをめくった先から文字がこぼれ落ちる。時間が経つごとに焦りがつる。書店内にいる他の客は次々に新たな本との出会いを果たし店を出ていくのに、私だけが本と向き合えず取り残されている。店内を右往左往している所を誰もが訝しげに覗き込んできている気がして、逃げるように人気のないコーナーへと足を踏み入れた。

そこは、図書館の分類番号であれば“911”に相当する場所だった。高さのまばらな詩歌の作品集や教本が所狭しと並んでいる。昔、このコーナーで詩集を買っ

優秀賞

「ラノベの世界を知って」

建築学科3年 本田 朔也

た事をふと思い出した。装丁も綺麗で余白も丁寧にとつてあり、なおかつ解説が入っている本はかなりの値段がした。所持金をほとんど使い切ってしまったこと。いつか臨時収入があれば次は歌集を、と考えていたこと。

小説はだめだったが詩歌なら、と棚に歩み寄りじっくりと眺める。見知った歌人の名前が沢山あったが、その内の一人“石川啄木”が目にとまった。世間一般ではどうか分からないが、私自身の感覚としては比較的最近の歌人だ。どの仕事も長続きせず借金塗れの生活を送っていた、自堕落な歌人。国語の授業のみの浅い知識ではこれくらいしか思い出せなかったが、それでも手に取る理由としては充分だった。どんな小説も読む気になれず部屋の隅に積み続けている罪悪感がこの歌人と重なった。小説が読めないなりの軽い拾い読みでも伝わってくる編者の真摯な思いも気に入り、彼の歌集を二冊選んだ。他に現代歌人の本を一冊、そして定期購読している漫画雑誌を一冊。これで図書カードをほとんど使い切ることができた。

家に帰ってさっそく中を確認する。三行の塊が一ページに二つ、見開きで合計四つの短歌が目に入る。三行分かち書き、という言葉を知った覚えがある。そういえば石川啄木のことだったかもしれないな、と思いつつ少し読んでみることにした。

小説と違い短歌は三十一音で完結する。小説だと長い文章の先によく世界が展開していくことがほとんどだが、三十一音の世界は突然始まり突然終わる。その中に世界があり、物語があり、時があるのだ。三十一音なら崩れる前に掴み取ることができた。こぼれ落ちる前に拾い上げることができた。久しく感じていなかった現実とは別の世界が開く喜びを、短歌によってようやく味わうことができた。夢中になりすぎて危うく夕飯を食べ損ねる所だったが、それすらも嬉しく思えるほどに、自分に読める本があるという事を幸せに感じていた。

次の日の朝、いつも本が入っている小さな鞆から小説を一冊取り出した。ぽっかりと空いた一冊分のスペースには、まだ少しよそよそしい顔をした“一握の砂”が読みかけのしおりを挟んだまま入ることとなった。

僕の人生はいつも隣に本があった。物心の付く頃には母親の読みきかせのお陰ですっかり読書の楽しみを知ってしまっていたし、長期休暇では2ヶ月足らずの間に100冊以上もの本を読破したこともある。出掛け先にも文庫を持ち歩き、隙あらば活字を目で追い、自分で執筆することすらある、そんな本と共にあった僕の17年の中からエピソードを1つ、語りたいと思う。

初めて「ライトノベル」と読ばれるジャンルの小説に触れたのは米子市立図書館でのこと。それは、中学生になる年の春休みだ。

その頃の僕は、格好つけて村上春樹さんの小説を好んで読むような斜に構えた少年だった。どこかファンタジーな要素を持つ村上ワールドを好み、非日常への憧れを抱いた僕には当時、大きな不満があった。それは、分量が少ないことである。小説は多くの場合が1冊、長くても上・中・下巻程度で完結してしまうことが多い。寂しかった。そんな中で、漫画のような表現を持ち、26もの巻数があったライトノベル「灼眼のシャナ」を手にとったのは必然だったのかも知れない。

それが僕に与えた衝撃は大きかった。知らない世界だった。1冊1冊の分量はそこまで多くない。絵も多い。文字だって軽かった。そして何より、面白かった。あの春、たった3日で26冊全巻を読破した僕は、とっくにライトノベルの世界に囚われてしまっていた。

中学に入学してみれば、小説は読んだことないけどラノベは読む、という人がいた。ラノベなら読みやすいと彼らは言った。そんな彼らと、特定のジャンルであれど大好きな本についての話が出来ると、そんなステキな中学生生活を、あの日、たまたま手を伸ばさなければ、僕は知らなかつたらう。

より芳く、堅苦しい小説を好まない人向けの文章を知ってからは、その他の小説もより一層楽しめるようになった。ジャンル1つ違うだけで見える世界の広さはケタが違う。友人を読書の沼にハマるキッカケにもし易い。

ラノベの世界を知って、本と共にあった僕の世界は広く、濃くなった。これはラノベに限った話ではない。どんなジャンルを開拓した時も同じだった。だが、タイミングと、そしてその衝撃の大きさが幼く若かった僕に与えた影響はきつと、他のジャンルの比ではない。

ひとつのジャンル、たった1つの本、それだけで世界は、人生は変わることを僕は知った。だから、これからは僕は読み続ける。まずは手を、伸ばしてみよう。

読書感想文・エッセイコンクール入選作品紹介と講評

入選作品等紹介

【読書感想文部門】

入選	学科・学年	氏名	題名
最優秀賞	建築学科5年	渡下 宗太郎	「変身」を読んで
優秀賞	電気情報工学科1年	亀尾 茉央	私たちの使命
〃	建築学科1年	野口 凛太郎	星の王子さまとぼく
佳作	機械工学科1年	下池 遼平	『羊と鋼の森』を読んで
〃	電子制御工学科1年	加藤 崇	カフカ「変身」を読んで
〃	建築学科1年	藤田 真綾	宮下奈都『羊と鋼の森』を読んで

【エッセイ部門】

入選	学科・学年	氏名	タイトル
最優秀賞	物質工学科5年	佐々木 眞央	面白がること
優秀賞	電気情報工学科5年	種 香夏	小説が読めなくなった話
〃	建築学科3年	本田 朔也	ラノベの世界を知って
佳作	電気情報工学科4年	高塚 優太	最も身近なエンターテインメント



講評 読書感想文・エッセイコンクール

教養教育科(国語) 辻本 桜介

紙幅の都合もあるので、掲載作品を中心にコンクールを振り返りたいと思います。

読書感想文コンクールは、カフカ『変身』を対象とする作品が2つ入賞した点がまず注目されます。ある日、自分が毒虫に変身していたら…という、極めて理不尽な問いは、若い人にとって大変刺激的なことでしょう。渡下君はこのテーマを、自己が他人の認識によって形成されることの比喻と読み、主体的な自己形成が必要との考えに及んでいます。この、読書が人間の内面形成に関してヒントを齎すという点は、野口君が、想像力の大切さや、時間と物の価値の関係に気付いたこと、あるいは亀尾さんが、人間は「共感」「協力」を必要とする生物であると考え至ったこと、にも見て取れるように思います。私の目で学生の皆さんを見ていても、皆多かれ少なかれ悩みを持っていて、中にはかなり心配なケースもありますが、本からヒントを得るといことは大変有益なのではないでしょうか。

エッセイコンクールでは、まず佐々木さんと種さん

の文章が、内面に抱えた問題点をどう乗り越えるかということについて、示唆的です。「面白がること」をこころがける、石川啄木の短歌作品を手にとってみる、という話は、一見すると、どちらも論理的に導かれる解決案という訳ではないようです。しかし、そのような偶然めぐりあった発想が心と相応じることもあるのであって、そういった経験を書き綴っている点は、いかにもエッセイらしいものでしょう。一方、本田君の文章は「本と共にあった僕の17年」におけるエピソードを、確かに具体的に書き綴っているのですが、それと同時に、勢いある書き振りそのものがまさに“17年本と共にあった”ことを示しているところに、私は面白さを感じます。何の枷も無いエッセイにおいては、作者が意のままに言葉を操れるところが良いわけです。

我々教員も、論文を書くだけでなく、多様なジャンルに挑戦することが思考の幅を広げることになるのかもしれません。

ビブリオバトル 「令和元年度ビブリオバトル校内大会」(令和元年7月17日(水))

	学科・学年	氏名	本のタイトル	著者等
 チャンプ本	電子制御工学科3年	森 正晴	「最短の時間で最大の成果を手に入れる超効率勉強法」	メンタリストDaiGo
 準チャンプ本	建築学科3年	本田 朔也	「忘却のレーテ」	法条 遥
 準チャンプ本	電子制御工学科1年	加藤 崇	「青くて痛くて脆い」	住野 よる

ビブリオバトルに参加して

図書委員 物質工学科3年 足立 美咲

皆さんは「ビブリオバトル」を知っていますか？ビブリオバトルとは、本を用いて人と人を繋げ、人と知識を繋げる知的遊戯のことで、「知的書評合戦」とも呼ばれているものです。私は、高専に入学し、図書委員になるまでビブリオバトルというものを知りませんでした。ビブリオバトルについて調べた際、発表時間5分は長いと思っていました。しかし、バトラーの発表を聴いていると5分という時間はとても短く感じました。

私は読書が好きなので、今までいろいろな本を読んできましたが、今回、バトラーが発表された本は、読んだことのないものばかりでした。どのバトラーの発表も5分では足りないくらいとても面白く、もっと聴きたくなるようなものばかりでした。また、ディスカッションの際に、より詳しい本の内容や、バトラーの感想、観覧者の意見に対するバトラーの考えなども知れたので、ディスカッションを含めてビブリオバトルだと感じました。

今回のビブリオバトルもとても盛り上がりました。今回のビブリオバトルの成功は、バトラーだけでなく、参加してくださった皆さんのおかげだと思います。

皆さんが少しでもビブリオバトルに興味を持ってもらえるとても嬉しいです。これからもビブリオバトルは開催するので、少しでも興味が出たら、話を聞くだけでも良いので参加してみてください。

「全国高等学校ビブリオバトル2019鳥取県大会」(令和元年12月8日(日))

電子制御工学科3年 森 正晴さん、建築学科3年 本田 朔也さんの2名が出場し、本田 朔也さんが奨励賞を受賞しました。

ビブリオバトル鳥取県大会に出場して

電子制御工学科3年 森 正晴

私は、12月8日に行われたビブリオバトルの県大会に参加してきました。前日に39℃の熱が出て出場できるか分からない状況でしたが、無事に出場することができて嬉しかったです。結果は、同じ予選グループに最終的に全国出場を決めたバトラーがおられ私は予選で負けました。しかし今までで一番落ち着いて自分の発表を行うことができ、個人的にとっても満足しています。ビブリオバトルを通して人に自分の考えを上手に伝える術を学べた気がしました。

ブックハンティング

『ブックハンティング』
場 所：今井書店錦町店

日 時：令和元年12月3日(火)
参加者：学生6名

ブックハンティングに参加して

図書委員 電子制御工学科2年 赤井 千珠

今回のブックハンティングには図書委員3名、学生3名の計6名が参加しました。全員で約40冊の幅広いジャンルで選んできました。初めて参加しましたが、学生目線で本を選べるというところに魅力を感じました。自分が過去に読んで面白かったもの、皆さんに共有したいもの、各々が考えて本を選びました。学生目線の読みやすい本になっているのでぜひ、図書館へ本を借りに来てください。

